蒙

狩野文庫

若菜

以哥為巻名　但若菜と
つゞける詞みえず
これにつきていつもらん若菜乃
移りゆきしいまとるかたくの事
重
毛詩采薇名篇之例不過也
其首偏挙則或上或下云々
或
若菜ハ相当或下たるへし
只若菜といふへきにあらす和歌に
菜といふりう云々

式部の宮の姫君と申し
とありけるに藤壺御の
ゆかりなるによりまうて
源氏十七才三月より秋まで
のまゝ記せるあり

まことにや瘧病
文瘧　詩瘧切音閃
平声瘧病
夕顔巻河原院より帰る比に

なにかし寺
よろつにまじなひ
まじなひ厭術也ことに加持也
松葉の句をそへましなふ事
結呪り人を指にて
せ用る也
なにかしてら
北山　向南山
鞍馬寺也
鞍馬寺首尾四十九院あり仏法
盛地也

六帖
湊やきゝのみちの浅ら持
なる人縁てあれやぬらん
此哥につきてつらぬる考證
とさ祝ありて僻事也
ふるみつらわれ清輔も
顕昭もみえたり
家のしるしとは定家卿を
始めの願といへる同編也
よく知りて世にも流布也
湊しるしつるを

此ノ義いましめらるゝと
つきてみえたり
ここやさとやうに人とに地の
中ねのやうにそうしるとことといへり
但此詞ましわらぬるの古今
の義世にしられて半信半信
昔にましわらのねうると云
此ひ人やそれましわらとも
しるとこれん
やそ則也

味こゝりしつる
志うびゝりとゝ云まとまいつる　みかえ
こゝそ　いうされてこゑん
如くとも
江いつかりて　老屈
円融院悩病給之時呂
天台社主尋禅老病而
術之由不気再三之後随召気入
奉加持即御平愈之
むかしのと　家の外之無漏の義也

やゝ峰そう　是より韓まゝの
ゐのさ庵
三月のつごもり　西白流気也
山乃さつゝい　一夜さう寺
今の世ならむまの鳥の都の記
衰らてゝ終さりとそう
庵のたゝまさい　庵のうさ月也
所をき　所をえさこ米人命とい
辛苦のあとをきもえされ家　をえさこ
或
ういろくあうさねまもろう哥

ゐやれはゆゝしく知らるゝ
寺の荒廃　鞍馬寺　若宮丸
院〻知仏法燈なる地
みつさ岩の中　あまたの見の
田舎ならねどもさびしき景色のある
山中は草屋なるべし
やつれたるつれど　次に病気と
よりてのやつれもとなる　貧侍など
も人のうとみえ　神と云てあやし
ほど見るにつけ病者のやつれもあはれ

いにしへ遠き海辺に住ひて足
中なと見かへすなと
又やつれたるやつれたるそれ　行旅
ねども　やつされたるのくまや
あるしらや　旅の程　かうやもなきこと
一日の行のや　漂白ならひあれ
中さるゝ也
きんるゝ　路旅らん也
東行七十歳以後は路旅をせぬ也
路旅はいまは世古の作也　世上の

まちと持られさやみすも
忘れるなと
村ころきほうえ　羽織（覚）なとの
まちゝ今ゝおれ来世の月おれ
ひとけぬこ　森清涼の花山を
題号の〜保ろると
大（ダイ）どこ　大徳ゝ
さんさ物　質ちと白ほし
すの也　含字　吸飲合を
俗にすきつるとそり

村の筆とすゝそとこら　喰起
からなと　加持ゝ
佛日影現（擁護）衆生之心水謂
加衆生之心水持佛日謂持
僧房（リウバウ）
清ら村り　此門それ　鞍馬寺
浄覚するを　盤折（ツヅラオリ）　九折とかり
俗に　七てかりとあり
村しこ仏寄なを　小栗傳
よろ川の月三さ海てやよれ　さかしく

みゆるに
やらう 唐土に廊土に
なるし須和の
箕上の母は叔父也
このことは 三年禁裏の
よし来てみゆ
ひとつき 須和の組に
あやりやつける
是ひれしれとあやら節奈
かるのさ浄をつりれに

聞もこえきれ
須和の源和わときのや
すゝりとし
きよけなやうし
尼公の名仕に童女なれ
あつ 阿伽にあるい桃譲に
佛おときにゐれに
しるよ 法友の人々に姪に
か
おりてのそむもあり
是ものは往の人にともされぬるも

よろづ人のことをもあはれくらく
みえたるし
君はとこなるひ 念誦をせし
いろうんと
とりも瀧の参へきつねと見れは
そのうち御身をせ
瀧公はまことるしまのあれとへ
おこねのみあるをと
おもわしいれねかん
道ひとおねのとくと人ての中に

そりへのみて 源の三位頼政
おもりをとまうつていさんなれ
そしいとくしるなる
かゝるまて 源家の親と
ゆく思ひのまゝて 他念はあるまじき
これは 人々の親も
人の国 他国も
異国の下に 非不縄
人のあまるも ことあり

御忌　或 須テりそ浦をも
しほともつへきを
或 元文をもちは常山の地勢の
ある蛇を何ともあてにかあらを
よろこ尾をとりて頭をさしそ
頭をとれは尾つけしいるを
何ものうけ滝間の嶽にて
文うしのくよ　又これより良清の
物語とみるへきんとあり
ちうる者は　良清の申し

日 良清は播磨守の子なりし國の
名をとよくしれる
須磨明石の浦の者をちかき所を
こりふつさる　又西は西に隠
かくれる何の興あるはおさ　凡京
ゆかわの　ジ　賞の事を七日
ゆふくるるを　何の是もすいる
草にうけて海の雲のかゝる
那他にあるに似さるとも
ガモチテヨム　新発意　新発意の説
シンボチ　糸

りんそ雜人に入人のある也
御堂関白出家しれて入道と云
これより傳りて多田満仲とハ
多田の新發意と云り
そいゝし　かくいへる說と云也
総すゑてある紙ともゝ
大臣のゝち　此人ハ大臣ノ後胤之
或父大臣之桐壺更衣の御子也
そうち　男ハ出男之男理もそ
要と云事いうもすへし

よのひゞきを　ひゝこゆるを
と為の中ねを
要之のあしつりそこ極まくきよ
集中ねと辭り歌圖に但るの
ひゝころるもとし
読者の中ヲ歌圖りも京極ハ
當するを　京極の中まも集ハ
當するを忠岑之左近番長也
右兵衛府生と云人もをさへ
ちらさ隔りのみなもと云ハ

枕ことはにあまたあるといへとも　こゝろ
よりその人まゝ見出す事也　とさ
くらきにかすわりをとまもりし
近衛殿御衛門殿御申されたる
もちゆるときは御酒といへるより
ちからあるへし　涅槃に入あかりけれは
めいふく　面目也
ねまりける　興日　ねかうときは
けるあつよ　面目なるとそ
まうけぬるに深き山をとり家
こゝろつきまし

三里のくふみなりよ
是より海つたひ越後にて
あとそりちとせ
ゆきさきは　山里こし
人のつき連
うかいなとのある　たき妻子の
笛を面白く興をやるへき絵の
の言のはとし
きいつゝ　近書とかあり
ちつさもすこし

おとなのさしつかへありな
一所のさたの人を
さらくてち　良清のかたせを
良清の文播にしるされて有は
のまし
京とそへて　京とそへて人の
宰ふとなるやうなれ國こそに
みなのものされて有といふへく
まことなるにや也

さはいへと　國の人をあなつる迄
くみといへとも
のかるまれさらし　國の守て
いたらし後蔭れて富有なる
さ後を
中くやさしくありけり
前に　國のつかされ三とせといけると
云いりの物語れたる人のあし
さ後ときこゆる松茂ねかふとは
あそうてけまちとこえん

さればこそとあれと　渡世の同然
悲しくもあれ　嬉しくもあれ
良清が営之
貴
えんせ　忍様之
まいくの　橘戸閣閣之　一位亭年
とれ　去年ならは　ゆえるまゝまゝ
閻の
仲のつきとをり
さる人もく　いらうと
うらむられ　寂りをさうと

御身のく　入舟の御身み浮瑠
ゝたあるにとと
この人　明るよし　大夫の
後流もろく　つきに　廿人とと
松かつきさゝとと
葭の名あれと　坂とも　廿葭の
花草のやそをみてう
御くをくれて　入舟死にのゝ
あ人に　いとをそろゝへとと

すまをうつして　入道の人と
見なしたまふにうちこし
すまへは宮せし
ゆいごんしとまれ
文も折りと　これをかねて
折りしきし
ふりそうわたみて　海にみることに
何れ海龍王の后にせんと思ふ
うきおもひ　常にいふきつつ

とぶらひし
かくいふは　明石入道にて
大臣の子にし　播磨守なる
ものことし
もと人より　近衛中将を捨て
おとし近衛にあひけるを
入道のゆいごんやうなるつべき
大臣よりかり　好色人なれ
入道のむすめを　明石上

をともうつきゆかうとき、
人丸とよばれし
いそやかにおほき、文一人のこと
それやいわが姫君と頼み
景清にうちまくらあまたとも
いまゆめきたりんを、
なるめでたる　岩のつく景
かまひるかりとのとてたいしん
けふ鏡出にすも　いまのゆめさんと

そこそこ　景清ゆへし
今はいかなれども母はゆくある
つまと　松風老木の名の
人は萬歳とみな三ち
彼は女と情してんふすまん
雛鶴のすゑ人丸萬回ぞをなす
めとそまうけて　親子都に
すくゆくこそ　かくまで
かうけなると人は

きゝしまゝにかくいふおのれ
とけしなし八月紀伊のはしめ雲国
ねとあらは人のゝ人ゝかとも
ならけるさ人ゝ住てゆかしき
ころさ国ゝをあけは
落流布後ゝ文字あらそ
はつらゆかしさんめ給へ
ともに住ゝ人なよ弟子に師匠もなき
人ゝぬてゆゝん許人のそれなきん

ゑなきの心　源氏初記
すまをそのえく海てのなといひ
ふとめしありける人めあれは海てなとは
われんてうさきわをと
うきのみるを海て人なとなを
つらんてこそみるめもおとりさる
ぬれんるきもくさしまるを
はなしくろさ初記
うすきつれ　源氏の人ゝつるに

またひとつまゐる　ひとつ人
ものしりなとゝいはれ[illegible]
ひとりきはこれも人ともん と
人に推当しるゝ
或
またひとつまゐると 徳切れ事ぬと
此隠人なれと 徳くし
才ことも此迄て [illegible]此地遠と
才打ちまゐれて 癡も才ことなれは此之
ふやうなと 東は日陽あれと聞

詞の姿を 犬ともの[illegible]
かゝる[illegible] 佛の人て やうなり
才て [illegible]しろく 見ゆる
日もいとおかし 猶用し 目も
猶りうくゆる事へし
まうけて [illegible]ゆる所によりて [illegible]
佛の人つゝき [illegible]く 坊を
あるなれは 人の心無くて 言出
用 言あるさまなし

うぬこしまさ　若菜あをし
つらねりのミもなる出生に
人こゝろうしめて是又源氏の
用意あらし
西ねそらしも　出もののろまに
たましもし
ぢぶつ　精仏
あまたりけり　伊勢の妹
第五の姫

殺そもつあり
おんこもえぬ殺ねるとあをし
中ぬきふかうあて尾ひ
ふところそく　脚息
ちやましもる　仕様なし
出ねくみか
守よ年（ヨリチアテリハカリ）
成しつき（糸）
うろのつらけて　若ゞ蘆とそ

蝶とらへて押ふる也
かの鳥にうきよるなり
上五 十りりや　生ニ
山吹とこの
春山吹は雨黄に紅黄吹は
雨露持ちて春黄也
ありける　さらやうたる也
生まれたるなり
うこはおへつき　古き物語の物語に

松つくる蝶と扇をとらへる也
いとあつくすゝなし　物語とて
さわとすりうるそうよし
ありにとしぞや　尼の絶
すゝし松つくる　似る也
それとおもひとるやうし
ことありと　汝我の推量也
実は嫁也
吉系 山ねて　犬ゐ也　言葉ノ系也

きいたこあれこそかれこそと
ちりもみぢちり
婦とこ　鳥辺野
このあたりなる　岩に二人か
とあり什人か仲納言へ
きいの人寺の　いかに縁ある道
さいなかりてこそ　羅なかるきこ
へつらきそれし　とつらきまきと
こ都らん
かゆの花を　望上の花と

いそあまねきにや　尼君の道
尼君の望みを情深く御心
そのゝ　尼君のあつらへき給へ
つらさるあとて　可菊鏡字の鳥
洲浜成経
こなたやと　こなたへとさこ
ついのなり　望上なり
さ尋のまゝりならぬまゝり
望上の御前もありしとさは
まるわつなるさをと

のんきし　かんきすつさ
あくらくしとこゑ
猪ひゆんさ海　はちへおとな
しくちりけさえて
可
調行　チヒテウ
流るゝ人とろし　さるは情あるべし
ふところし　はゆる人へと
叔童と　筆主の文章にて
と叔つれと又布と　叔つれと
筆主とんちとさいと

海を取つる　手海のんきさと
海く書しる面白し
けつるあと印も　居の術と
手筆主のおさうさ海と云ふ
うろすけ道　居のわるひ
私筆主をとみあの事んなりと
かそうりて　十はうもち
故らめ君は　筆主の母と
故をとれ　故は父摘章大神也
流をとれ私し　種物をせい

さへわすれとも
さくいふ　尼君の今のやうな
ものとし
すまに　花宴の人あそひ
須磨の　ほそなかにかけしき
姉しめに　くもとこちちあされる
初と
松かせん　その夢に雑草
花宴の　生まてとまるを　とてれい
をくれと　露も姫君はやせ

きんしうあるは海にもきえ
やれしとせたむあかつき
さとね　生まれと桐とをれは
桐壺に露きてもやられとも
葵のいらすしと
たとる　少納言也
幼草の　別のいまし
いその露の海をとてん行
生まての御事ともそこけ行
須都　尼君の兄也

こゝろには　見えたら縁の詞也
おなしこの　付心上の詞罷る也
やとつにはも　源氏方合つきたる也
或　こえて縁ある句を切てこに
縁あるてよ清し
あるみしや　座の縁也
世上の一思ね　肩書縁の詞也
せてみとしく名言紙之
ふるとまれは　君おかしれ哉
とよのことき ゆるし

うつ給ね　ちしと如方へ独恩也
あそわたる人を　源氏の人也
このたさあめとまい　儀をあへ人とも
惟光ねなれりしめて　すまの人乃
まして あまこそとする人也
さるましき　おもてもよね也
ありけちし　源氏のあはく　云也
しにうくみつるとき　つる人と
みつけぬよつけたるすゑかめの
くつと松ねそ也

○ちご　男女ともに幼少なるを
ちごといへり
○から人のかざりに
○或 鬘つらのかざり也
○うちつけにめつらに　○源氏之
○こちやまとにしに
○月ともろこし　○或 前の坊ろろ字
ゆきてみれば聖をひやなし
○よろこびにけりつる　○遍の字
まちもあはん

○ごん遍ノ字　○すくなくしてかくハ不声ノ
よろこぶ時ハ卑声ニ張をする
人といふもろこしきつん　○山客詩ニ
近人積水無鷗鷺　時有歸牛
浮鼻過（ヨギル）　過（ヨキル）ハ来ル也
○是より僧都の使の詞也
○ところをみる　○うみわかる也
○或 母とろく　猫ともいへり　又
驚くもいへり　○ことに
○手 日記ぶるとにわれ驚くもうみきと云詞也

此駕籠に文にて駕籠駄賃十六
駕籠きかるんと段々と駕籠に
よるなしうそのえ心地すたしを
絶えせしてのんき気もろんれ
ゆのゆう歌
香よし　源知にきせる人参
ましく　嘉の字に
四谷るに婦れしく紀氏を
宗の出しろも　信綱の坊主
一首もあましとて

いとおいなさ　四谷にては
本喜多やまうとも
いぬる十匁目　賤しき源氏の
無下に下卑と　いぬるにて
うやまる人の　うやまる人に
百一駄なるとみすなひしやの為
いうかれて思ひなると
人のなるとももちあしつぬやに
とのまとも　やかな絵に
やまうちて流れ　足と東海

信しくさ所とし
すみれ草　やま僧都なとし
はしたか　無常篇之　源氏之
かくれわか跡の　三年こもりの
こすなとし
ますらをしき　素様　源氏之
海くさくみゆる之
ききに　物しれんとろし
手ぬまみゆる　或墨染之
おのつるつかそこにみそそまつ杉

なやと僧都のいひける人之
嘉なかつる　汁物之
つきそて　未雷　何事之
杉しぬ　或僧都の坊　杉之
けたもんとれ　或僧都の衣の舞之
杉の木まとも
或口物語は　本草とあり　なすよ物
のやしにかし之　言葉とある杉も　本草を
よみてよるを　字抑いや之こ
月夜なる此　或浄土の暁之

やりぬく　水の流れたるごとく
此句より前句まての心
さもあるべき事也　さもあるべきことは
いとあはれなりける事と也
うたてしおもひて
或説ニ前ハ三つの意をたてたり
尼の方に名香のけむりの修行の方
仏前の花ちれる其の追風也
名香　仏ニ供ずる香を名香と
とも云之牛頭栴檀などを名香と云

或いくし
合香は香を作る此香と云
其外の香也
それの人まで　或尼君の方の幽趣
よそめまで　まつて修行僧を
對しては密香の法理と檀法
すゝめ法花経を　つ此時
修行の行路修行也
まつりの浪　御供の人手に
あつまる也

知人の上におゐて喜撰のうへ
是らは不正也
○うつゝの相とことわる義も有
とみるへし
まへのちみ世　いはつきたるに
現世之　現世の苦のしるし果
感して後世の罪をまぬかれてと也
うきやうなる　出居也
猶月を携つ　物うとよき　いう
それも人の知る詞也

あらて神ならん　これより後の
生前の月を待つ心と思ひ
詞也
尊とみあれへしのうち　○或 尊像也
○年 寛の尊前ても如くし
○従来の相寛の言をふさぐ
あらつけある　肉しより也
○或 これより僧都の事也
高き詞もも　○此人の月を
あさくとやしるさ後僧都之

然るをとこ之
こ按察大納し
職原 陸奥者上古之東
為辺要為其国境広ニ而明
夫曾 和銅五年九月令置出羽
国元正天皇養老二年置
按察使令監察両国兼仍
陸奥出羽按察使と云
なかりけるに 紀有常の嫁之
こゝろうつろふ人の姉紀に

つまれ之
かく京にも 縉紳棟梁之の流
みな大納言の子息の 源氏の幼
行とあまさを陶とのみな之
すまくしき 好事の方にあるそ之
をあれて 業平を大臣のむすめ
と思ひれける之
むかしのおとこひとり
或 男より縉紳の女云之
大臣の女むかし情ある人之

十とせあまり

かしこう　六條とかつきて

すゑつむはなん

夕へまちける紛かに　大和

ゆきを拾ひや

六條のみやすん所　光源氏

其の比方　其の比方に　右大臣

松風の　やさしとき

末摘花　入　嫉妬も　なくて　高砂

やすらひ　おわします

物見して　法師の頭に盥あり

法師をは神と視てえ有さ

都まうでして　祈る

何をも　源氏の君に

みちのくまちかえて

后かまた　源氏君あまれし

かの人をかきひとしておるやと

源氏の姪きれて紛かると

人の顔も　人つらもとらんに

世々のちぎり心

かくされなくし行ゐなくて
よろしんとこ
抱(ヲ)れしそく　或 生ずるこ
或 生長(オホシタツ)　やしなひそだつるこ
いとあはれし　御恩の御恩
そだめたて　子之
とめ畜(キシ)てこそ子になりせ
何より母子の恩をとつくし
おくなりん行し　御恩の御
母親なくそうなるにや恩なるとこ

うまれても女子とこ
或 貴の御に生まれの母君の身をと
やれ汁そへあまりいの
ほかりとあれは汁 生まれの十りの
わるし只言之
うまれつけて　庶人の娘(ムスメ)の身をと
物思きし祢宜之
是の事かれし　庶人の娘の
よ仏思ぬもよれ　事なる之
清水のをと　御恩の恩

おもはれ あさきんと あなた
れてられは浪花しるを
あやしき 是そらちゝ師の廻
筑紫へやらくよしなれまき
兄人あれそ 白河切へと
かつらふに 若葉を
ひとりきこえそれ 或 つらそこまさ
兄いろつふ元もあれとも 御
兄てつぬとより 猶絶ぬると
ますまけちき 常世姫宮の

うねのいもせのみちひのやに
契りきれんつれもさそら
なし 今よりそてこころそんと
いとまつかるさ 僧都の御こ
むまれに 云寄之 一句之
羅睺羅てゐてる 楽きると
うきく 女手ての女のりとる
くらしくら 僧都に師考趣
うみれえ 拙くに 祖母趣
かゝり給てきこゆさやん

祖母(ばん)てまてそやうちを察し、文
やさんとこ和し
まくらに　まくし　さき向き
あみだ仏(ほとけ)　又須弥(しゅみ)の像
うやまひ　初祖の時(じ)
御月　きこしれとき
ジョウヤト読む
のうるはしめ　嵩くの経
気はんちも　疱瘡の名物
やまひし　きし

あまくし　蒼々山中の　さき
懸のよくとも下りて
山中一夜雨　樹杪(シュベウ)百重泉
とかいふれし
あまく水のさされ　いひをとをそくて
水のいよいよと雨ふりて　古
のたふるを　又の家水の
まるゝと　ゆふととしうると
ゆさ　ゐふさうれ　なつき
かろのみける　あまく

〽教の阿弥陀経如く
御時ハ孝をとけてよき
まゐらする人ハ　仏なき佛
諸して　源氏の昔語れ
末の松わるさ浪
うやといひしとも
手到婦りを争けるを
うらみも　花君ノ為
まのきえく　勝忍により
あふくる金珠のきえわくさ

あふるをあし
或 花君の為め　やかて書通
花吉野にて　とものきえわくなと
にあらうて　なかのある人ほと
あきらうらみと　或嫣妍絶
思ゆかりのさ角となぬる
んこと
そなたまでたなる
君の為にそてうる屏風
扇とさらし

手 ○夏をとひて扇をとれはすゝし
はれてあさくもちすゝめれと
昼ひけぬうちなりし
まつのかれとふ　涼しさくらあれと
或 ○かゆしつんつし
日のひかり ○はれてあさくもとも星滿ちたき
やちるゝこゑ星あかりおほはぬ
やすきことなる也
みちいつる人　かゆし
またうそ　遅し

あやし　手 ○口に頃つゝ面白さ
人もちかし
涼しのみちきのゆかりおのなまぬかな
ひちうきやとたりし
或 ○扇をなりゆうとちにきうて
おもいつゝ文やそうき　いはん
いまかなあやし　ひかりやと
いふるものかねに
佛の心うちに　或 ○涼やの組し
従冥（ジウミヤウ）入於冥永不聞佛名　読

ちやなのくるまかし
るまのわかひなる
まちかん　あかひそんき
浦風をそちらさ
いつもとこの　千鳥の絶
けさもたけ　浦裏の絶
河しもなりと　あはれつなく
わかんも　なかれぬと
さ河みなの　笑ひとみえにき
さきみなと　月のかみくちゆかれて

秋袖も露あつし　とと
（唄）おこ垣戸りんかの床のなかれん
あつるしぬ　あまさを　出雲
涙のおきのそて　はるさ　とらまと
ときこれそんや
おやにつくしれんとと
流し　さ袖の絶
こゆかりつくさ
つくらとき面白笑ひと　いとまさなき
ゆくつ

きゝしらけるを
蛬やつさ人ありしとは
きゝしらけるひ頭を
やさんとし　料歌行料に
俳諧もこの物語やさまを近
ものつゝ　源氏の詞
かくやいふ子細ありけりやと思ひ
なしてはそれつとし
これをきゝ　尾花に節かし
あるいはめし　尾花の紐を

世つける　ちとおもきや
誹諧しれんとし
さらぬは　よくつゝるを批判
ゆかしと思ふに　初草のかえのくと
のれとかみのくすのこゝろを　それきし
いしらぬと
垣間見してゆかしつることばして
尾花のまくし　東雲をとゞめ
うらみれ　若のまくのあか雲し

短冊之事

短冊なとにハ　或唐紙の事

文字の上ハ白とりあるへき

只墨の紙も色そかへるあるへき

わりの色紙をすれハよきなるの

格子にこしらへりそろへあるへし

紙色位の紙と紅　求へし

或こゝろの書まハ　紙の色の紙をたとへし

ひろさし　或唐紙の類之

或くハしきの色めくとおもへり

夕されハうすきさくら紙より

秋の色さくらきさうり何

初春なりなりとおもはり

こゝろハ　谷のへつれあり

源氏の歌すゝ　直に御色なるを以へし

うたしはさくとも

恋のかし紅とも　唐紙ニ御色しれ

中らさとの谷れつみそく家て

しらけれさとと

ひらと紫の　唐紙の類之

此のたびハ[illegible]人の[illegible]

しくやまさん[illegible]

ころつらさ

はしらくかせ[illegible]

まにものやのちる　[illegible]

これ[illegible]中さん[illegible]いてちる[illegible]

きれ[illegible]ハ[illegible]れハとき

かてけ[illegible]し

来こ　[illegible]ハ世[illegible]こそ

[illegible]中さあも[illegible]のまゝきもこ

人もそもみ[illegible]きまん

こちつけあさハるりと

ごれより[illegible]の細こ

あさけ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]さハ[illegible]つみてと[illegible]

見[illegible]もれも[illegible]さし

あきつれ[illegible]うつろきやしは

見え[illegible]とき

佛ハ此のつとて

手ゆくさまの如佛ハもとも

あるつしとき

[illegible]

〇お手ニ御のうへいとていふ
尾ニ対する御面白し
なとすい　〇尾手の物わ
人々のくさとしれえきら
いか成るも
世と思ひく　〇尾手の紐
〇縫物のさらつけまとのつとて
もまとてり
織しかし見えひかつきつ
こかく作りて深くいあしきと

あそびて　〇縫物の道女子のわざ
うみさらぬはせん　〇針の母の
縫物をとれ母見て見なれ
〇針の道りしわらそうあせんと
女子のいろき　〇縫物も幼少
の時母見れでとれれ
のわて生まし紙とくをうけれ
かれて
ことしなさせ　〇みちてるる
なりしくひとく

かゝる侍りさうらへさうらへん
こゝもと名残惜しし
とまれつおそれながらとも
おかされん和そも　文つおそれ
さてさもれ　松本されんすれ
はすつぬとも
いとま申して　是より五條の橋
きこしめしひかれ
まつあやかりぬとも
あゆしさまもらへ　居こし

こゝちん　有明てそめれ
ぬとも　旅行くそしとも
みなおわつまかれん　源氏の名
皆らしく家りやゐとも
あまさく　あまこそと　咲て
ちりそれ
是ひにるさ海ことする
いとまけあはれすひか　尾上の花
侍縁　帝より入らせ給ふ

浄和もまのこゝろし
よしつく（深のこゝとなるの綱と）浄和の絹と
ちとらん門 おこありし扇風
法華三昧（ザンマイ） 常ニハホツケザンマイト
涌るなり
三昧ハ梵語コヽニハ正受ト云
又正見トナツクル
法華懺法ハ南岳ノ智者大師
ホこるふ方の法門なり
六根罪ヲ懺悔シテ清浄ニ

淵るんトこゝろゑし
叶 天台摩訶止観ニ四種三昧アリ
イハユル常行常座ノ三昧ナリ
半行半座非行非座ノ四種也
或 常行ハ行道ス常座ハ座禅ス
半行半座ハ立ツ居ツナリ
非行非座ハ立ニモアラス坐ニモ
アラス非行非座ヲ随自意
三昧トモ云ヘシ 常行ハ常座ニ
半行半座ニ非行非座ヲ合セテ

四種三昧也

源のきとひきあひより

或 懺法と源ノ名ロニト云ヲ仁ト云リ

唄よりふかくとゝの 浄心の空

覚の 円法の声に 浄土の

菩薩もぞ 國も生けるは方 如く

或 懺法の声と 源の音と 思の空

行くらし 神しける

千 けふ一乗 經とあり

源心のきとも いつ有 南无

源心の空にみち 行くきよし

秋さしよりは 神のきし山 おはし

住まれ 経の空きよら

するさらくとぞ ちかしと 経の空と

家してこそり

経の空とみちは 行くこれ

隈に 神とあらし おれ 紙

まあるくは 行くそとこ

五あよの様也 波松風

けさ人や 松のみちつらん

或
ちしくさの清濁も東坡經
千句付清濁も濁ん
はしうもたとへもすなと擬據すに
ひとつの野中のしれみすしに
所しらぬ歌ならけり
はすのみなも濁ところ
みまれ作りしきりや
信紀のあとし
菊れんとと押あてさへん
淵のうきしい山花の
あきまれみく　浮の岡の名
乃扇なりへし

さこえうとまく　さとなしともなく
青山面白都こ
名あしれ　白氏草堂記云
雑木異草蓋覆其上綠陰
蒙々朱實離々不識其名
四時一色なり
庭のことあるくも
或
涼さの生に庭のさまあるを
まる事　なり侍し
詞のところも

さうして僧都の坊へ手をひき
ごさん　護身し　身のうちあまたと　三部の印して
すきひまある　歯を噛みての
すこしひまある　老人の殺
ありつゝし
ぐつすれ　切の入ると
ちしよよりまうり　陀羅尼は梵語
翻ずれば惣持と云　悪を捨
善を　身をもつ口と
のまくのくて　都よりみちの遠

とこらぬつら　癒の殺さる
ねしらぬ　書よりの使と
よのるみぬ　いかる法師も者と
誕生する　世をめぐり給ふ
岩のそこ庵て　前をつけ給ふ
深くわとのらぬと
あとおりの　前もけ二とと
とる　三年　禁足とみても
中くも　却るを年中ね
よりも孫をとこれよし

山水は　源氏の須之
かてきれい　畏児て御京　すなとえ
ところの須の　須のちれ　さくに
みも松にきんとと
宮人は須てきうん　源氏の　京之
生気の流もちゐきうてきれも
みゆくこ京へて御京てうん
とし風ちきほとこ京ん人もきれ　ころゝくのんに　見及ひ稲ん
なるあやらゝ　同も怪しきる
源氏の意のまれるといり

うどんげの花
源氏を優曇華にたとへたり
天台云　優曇鉢華三千年
一現　現則金輪王出云々
一説云此花開時金輪三千年
又毎三千年非云出現
又句　うゝ家　源江に　桑し
は音人　時
海中に蔵するたよりれ此花
出現するとも是を　文源氏を
結ふらてにようすとされ

山水に　源氏の綱之
かりてきれ〱　果見へて悔涼
とこの夢の　夢のちかね
みもおちきんとと　きぬに
言へ云へ　源氏の道
けふの流もちつきれぬ　それも
みつくころんて悔気てそれへ
ことし流りさはころん　ちきれ
こらくのんで　見及宿
ゐもあやちすと　目も怪しき
源氏の嘉のかれたるといへり

うどんげの花
源氏と優曇華花と法しらさ
優曇華花は輪王出世の瑞と
故号霊瑞花人寿八万歳
の時金輪王遠四州出時
値如来滅するたゞれ此花
出現すると是を　文字源氏と
縁ちらてしよりてゆるとされ

みな様かねもとよりねとし
ほとけみて　御ゆびのさきと
ゆびあはせて　御ゆびの獨鈷と申
しそのねし　佛のとくをあらはし
のねし
ござしくなるとく法流久をと
のみ二現の人と
四のえらけ　御ゆびの立てと
引けるれわりし
すくらの　宝の京し

むろみたまはるほとは又い
錦しあれとも絵て画道と
うちあまれて　或ひ又のさ俺と
トッコ
とこ
獨鈷は菩提心ノ表相　獨鈷也
みれて　或宝の獨鈷まつる
を結ばのみならず比叡と
信仰もあつくまつる
ほとくなりし　聖徳太子
くらまより百済国よりくわたる

こんがうじ 金剛子数珠と
ちみくわり 百濟國と
まきたるふくろ 透紙と
すゞ紙と 網のやうに染めて
すゝろか紙と
ごえうの枝と 五葉の松の枝
こんるりの 紺瑠璃
瑠璃は八種ありといへり
ゐくすりとも いはれて 醫者の薬と
思ひよらずと 或 病者に対してなる

さ纏しつる 綾纏
まきけの袖 われもかうけ
墨つる袖とも如くし
綸子に 布段しけると
ふこ纏として出ける
出けるとあれとも 貧うつくしんと
しけるまでと
うちにてはらぬ 綸総西へ流るる
底に津まるをつさき中 さらさる
くもいまこえ 幼女あれたこ

或平家の無官と
四五年（シゴネン ヨトセイツトセ）
さるんと　僧都平家の無官
中さるに関にて源氏の人々と
枯るす海と　平家の無官
まへを乗し　さ海と
ゆやうわて　平家へ源氏あまた
みすれ　源氏の公と
又筆を頭をたらて　ぞり
かいたらの事をなめし給

雨らや　平家の公と
源氏の今度のあらそひさと
もあ給と雨らそゆとあり
あるまらんと　源のとつり
そえいつてるまと　若宮らんと
源氏の本ふのかきあられ
いるん
こうまておれてりよろこびそ
嬉しく思て　さるらんと
つるそも新しく

花子の子の弟と
中車とそまつるれと
御車とうさらし様と
大谷　友右衛門と
友升　半四郎の兄と
市川きんてうし
芝翫その兄弟の右の宗十郎とえん
好あほさうなとの和
おやにみやさるる又輔く
こかりぬさ

やそれの　面白き尾上
あさとはうあく　松本幸四郎
こよふ身の　俳句系菊之助
かつきの声きまへけるや
るのあうるやえ升と白猿　こらみ
其うやましくほしつくや
山なき役あり
人よりい　人をまさりれ
とも酒やのあちりほそく開も
うつさるとと

まつのひゞきと
随身ニ嘯人声ハやわらかしこし
嘯 鄭注曰 説文曰 嘯（キヤウ）人所吹
其声悲切 韋名 呼衆
笙のねを
笙 説文曰 笙十三簧 象鳳之
身 爾雅曰 列管以象鳳翼也 或曰
鷺翼鳳鳥音 古雅曰 笙理
之簧 郭璞注曰 列管匏（ハウ）中 施簧
管端 鷺鳳ハ丈婦也

琴をひきつゝ
琴 神農作 ことに元五絃 宮
商角徴羽是也 加文武二絃
合七絃也
琴操曰 長三尺六寸六分 象
三百六十日 前廣後狭 象尊卑
上円下方 象天地 五絃象五行
此器由上古渡来本朝之全方通
允恭天皇以下令弾給之由見
日本紀 其後箏琴之比まても同じ

聞きる人なくて書へ求當
斷絶之
又白虎通云琴者禁也禁止
於邪氣以正人心也云々
源氏もろこしのみかといにしへの
印も此の言葉とくる道也
とゝて綺琴とあるを云
すゝかもいとありけん
らすとりとも
琴書曰師曠鼓琴之樂道

工於琴絶當塞暑占風雨
習平出鼓之感玄鶴六上舞
瓠巴鼓琴瑟鳥舞而鳴魚躍
而遊矣 列子
みちら山ち 源わくのわすゝ
源しのうちて
けまくもて 忠まくのほと
源氏の名色あるありさまゝ
をとそくし 姉
あこれ紗の

牢青人偽思我のくのとれり
仏の教へは日本の内国の
末の世まで連綿ありくるこそ
この世に名　寺院は
まのありさ塔　寺もまた寺あり宝
仏ともぬ人の
うちくるるこそ　宗の海
天下の河伊豆　浄家の宗内あり
いふちてし　宗門の六く浄家の類多

まつ頃くは　大ところさ称し
ゆくと杉をめぐり
いまくし　さくし
あまりあるまる　宗門の名網
七高山ハ何関楽をとる
近江 比叡山 比良山 美乃 伊吹山
山城 愛宕山 摂津 神峯寺
大和 金峯山 葛木山
かくるもの　真言宗の行功積りて
神獨あるをみる今とまそしけり

けふもとし

大殿にはりあらで 葵上之事也

一日二日（ひとひ ふつか）

まうで給ふ 葵上の方ハ退出也

みつからうち入て

秘事は大殿の事也

車ハ下付に後をりて乗給ふ

自後乗給上首の人先乗に乗

あり源氏を貴て右に乗れる

奥の方ニ乗給也

以人たく 源氏をもそのつまなれ

右大臣のくるまを心やすく見給也

源氏ハくやしく二条院へと見給

車ハ右左の門にとまりにけれ

同車して退出也

女君達の 夢しきちとお

葵上のさ別也

さん 領也 きたに切るゝ也

うちうちこそあれてものとく

よしかしこさ松御也

様とねても　浮名の立つ顔
私くるまもあなたさん
時しれとこより朝なさきさん
秋　湯あみの夕顔さし
世まへ　手をとつて顔
咲いて　湯あみの　夢をやさしき顔
よみする　うちとけぬ咲きし
色をしのぶ　咲くも色にそ
あれこそこし
唄　よみする　やさしきとは

夫婦のことゝて
まねてつき　芸妓の顔
気もとけて　そのしるしをねた
つきせぬもまたあらける
色とてそつれなき人　恋とぞ　とうね
つきせぬともん
世のうきを抱かやあんどする
百舌叶て
ひとこそ色をあかつね　つれ
のんでまたあなたつきと

浄るりの無言とか慣みるべし
浄るりの語りあやうくて積りあるを
以て雅し
まま遣くは　一言も無曲とし
浄るりの知ら通の
まめなるをいつくしく
はすかふ中しいわたるとあれ
かならず離れまあるを常にいひあさ
かくいふ曲もあるべしとし
直　まめなるをいふいま夫婦の間まで

うち秘なること也
よろしきに　常住し
もしいまさ　男女愛夫婦の　百
まはあれ恋するも陽ならむとし
いとはなれし　ようやくやさしくなさねる
なれそめけれども　いひかけて　つれ　まことも
よしや命に　死ぬ程思ふまで
惣なる人のくらしもさまざま　まことも
命にくるる物なく　何の別の
くまもしつきし
或　いみらうたんなとる　もとむまうくまいらく

此うたしめ今んみよ舎あらね也やさしき
人やよそれと　世を经る人と也
何れもしく　こそやトアリ
ミんて　きふ和ちものことわき白うえ　人を
うらしもちんどこう用ルナラバさても
何の列のとまれいは　訓けしめ征ぞや

えうそ和ともの　ふしあ
移てけし　時より
或 宣寝ゑなり
ありせとける　世をあけと
蕤華のすとゆきて　世の
なとのはし　如し

ちはやふる　神世には
うたの文字も　定まらず
すなほにして　ことの心わきがたかりけらし
人の世となりて　すさのをのみことよりぞ
みそもじあまりひともじは　よみける
あて　三十文字
まちやの　さちやのなを
まちやのみるは　くや　須佐
人よ八雲の　あちん

うちあけられて　御めと
あさくつらからぬやあらん
御あはれと　若君の事すこしは御め
くとめさるる彼ねみけしきて
まかれ給ふものいまみめと
給ひけり　御めと
或
室宮寝殿なり
こひせられり　世の中の事と
或
筑前のまりと給て　世の
なとのよ　御くり

こもりのゑ　世上に
うけたまはりて　居もめくへし
つねに思ひもかけさされ
よりていかりきこえ
いつかすみて　何せ給ふ
色々のきは　世上の事を
あて　言葉に越えたまはんに
まゐらせ給の　まゐりやつかれと
御おもやつるはかりしと　御ある
に又はむ数のあさん

うれしさう　一踏に
菜葉て一荷とともにまかと
菜葉て二膳の御膳する流しとと
中　是に家の似れて菜葉の都
に御礼松とあやしく見えしを
きもにひとつ御膳なれのやうに
てよそのぬ二帰してのやと
いそとふうし松わか
菜葉のゆうなれは菜て深く松をさ
のみ文字を云よりこて候の

今宵人まて見え御礼申
おろし
その日　翌日祖母の方へ参るを
やりぬる
俗縁をも　僧縁にも伸くめを
つつみまさし
あまたまわれり
広くのまの初に
えゆうし　新年の御つほ
さにえ見稲をとののなまりちとさえ

をし
ぼりてもはべれども
かゝり　うくわざとすべき節
まれも露草ちらぬるかなしさを
みゆるとも
中よりいさく　或　居まへの文の中に
ちいさくてあるもせまく如く
なりけんをとも　浦の言
あれこそと留て来しと也
中とゞめてきこえしも雪気え
くらうし独身也いる茂めうし

ゆきとまりてこそくらうつまし
あやしやねのたなと強ける
此中ゑくきてゆえ
よるの風の流も
初ちるをとなり
胡よう記にたみろ梅紅よ
まよれのうしろかゝれ
そうつこはる　うつし文也
中　にを板二を之に口をとを
ことを打はらに墨田打て

されとよそにやし一つこそまされ
薬もしは砂金のこくうこそ
同しやうちとわそく切てひかり
てくひとゆきて
ほぞすゝる　そしもさら
反るのめはこ　中るてると
或中右と中さきと云へる同し
仍さは央也顔師古曰未央猶
未半也文選枚乗注曰央盡也
さしえてる事さえてる事数也宿
の半の候へ半あまりのころ

一說云さらは沈にほそとるは
ほそてるとこくほりの沈きて
央頭界中也
法師須界破ると云アリ
ワカヒノキカトミエルミ終ラハ界中ハ
カキリノ中ナルヘシ
中未編中さらは中はの遠
集ゆもあやと　ゆもおもろくし
怪之　驚之
このほしくし
或尼さるとのめるさ

酒のみと仰ぎつつ立ち寄れば
うきまし きよらかに
ゆくその 行き過ぎて
花のゆくて あとにおくれて
これより西行の遊行の跡に
先人になつかしみて足をとどめ
婦りさんせ やさしの人と
女ものつげた
京都東山高台寺の
ちかい寺めぐりして のやまかな
まつ婦人の しめしけることに

是よりして西行の寺
此寺を遊行しながら へ参りき
まつらのむさ坊さんとりそて
為の西行のまちためたち
うきうきみれるはけ ききと いふ
さすも さまありそうなもの
きさらぎ
有りけらみすべし
わし此尾上の 尾上のねと
西行のころ 此尾上のかと
いつに此遊ぶは 西行の上をするとな

をいふ花は高きの様ちぬ 下に
けの間よりくまゝにあらはされぬ
ものさゝき出まのふしろめき
すまそ侍りとし
惟光の月ごろもとより まゐ
ぬめぬるし
いとしろゝかで 御まの御
よのみ死ぬしうろさきと あり
されちもえつとめいそうろ
めづらしき御いとあり

二三日(フツカミカ)ありて
惟光まゐりて 見えまゐらする
つゝしみ侍りし
あつし あるへし也
ゆゑなきぬ 惟光の乞ひ
いそけるを守りけり
惟光のゆまみの所みてる娘に
一向幼なる袖をと見え
ませしねとも まゐらゝまうく
行あそるありちらるゝまゐらするね

とかくまきらはしくもとらみはなし
うきとつく　みそきてやさし
後ありけりのしまりよるを
松かせのみありさ後
源氏の人の跡を憐まんするこ
おもひやりぬる　憐むこと
辭世の達しるちからそよくかし
つるもし
つまくに　けよくしる也
方便　遊仙窟

ゆしう　まくしきこ
おの慈ちらんやうなし
真實その中しらんすみきとこ
まなのちるき　香におもくかたき
ゆくへつけ待さあれはこと隠
をとけてくり　心なりのこと一字
つま放ちる也と三弦もつね
をとみてうらと也
あさの山　つもとえるらん蟋蟀こ
あまえの羽をとけて淺のふという

かけさせ給ひしハ新さかみかとの 新
の字をよミくせたまへる つき
方をとうけたまはりとそ
くみかめて 尾張の母君
紀やしくそくみかされける濃淋
此のゝめてゝ山の井のぬ
口ところめて紀やしとせしとも 竹馬
それより 方向ハ早すれ以そり
満さたるところの満さたまる
満ちを縦みたつきとし

一年 新とみをくきとあり
さみゆ満さなしやハこゝろの さまことなる
新とみをくさあさやかなるハ み
かしところ
惟さんも 昆つゝみ海りも
伊しさ伺ひろと
こみつゝ紀 尾張の新氏
女御より親
京の房て 坂揆寺大師の
家へりつしんとと

人にあるへし　源氏の人と
〔千〕居宅の顕範もよくかゝる事の
家にもかくれて極楽にいたると
とこそとくまつすくなりとそ
藤つ歌の文
三四月はなるへし
文章の文へ源氏をと
〔前〕文作伊井吉親（いかこ）直植武主と
前輩とは源氏学道のまことを
当時の儒者なとこれをつやまえ歌の
ますと思ひて物語一部をは淫乱

不道の書としける物のやうにいへり
前輩の人にはそれらの名別の子細
あることをしりて此物語一事として
先例なきをしるすなり　雖不載此　しるせ
先例をも考まなへるにや既
前に考て日本には先例不見也
我くらの子細あるもとみえたり
人にあくれて　源氏と
主と命婦　主氏の命婦と
〔匡〕前輩の宗長なと

みちゆく旅に　御供の人まいらせ
の勝し
こゝろあまりの思ひし
これらさへおもひ家ちかくなれる
まありと女の切なるみさゝり
よりともの　文字経し又拍と申上
とし百なりさし
源氏一郎の内よりもとより約
悲母の子を思ふの心にありて　手紙の考
さらしに　いめのすゝまれ如くも

やゝつとかくしをこ
いとゞしくて　昔に再会の事
いまはまた
涙く兄弟のあはれみしきに
ありあふて西すまれなる縁
物ことなくのおもふ御心再会を
思ひくかひて縁なりけるをもとめ
わかれての文字を伝へくらふた道
何とはなきありとそなり
なつしさくらけなれども文

うちとけて人のつゝきもそなし
なれめける　須磨の浦わ　すまわか
せめてなのめにみえれるの
あはれしと見侍るもの　すまゐ
初るつらきとし
なかるませとなく　須磨のくまとひ
にてそのえもちかき浦し
くる田のうて　くる山くる山　ゆくてふは河の字濁
はなしくくまし　そう
ては秋とともへし

秋のやくあはれにそゝく　くらさ
なくやとりとうまれきとし
宗祇へつらす
肖柏曉忌　ときあふにくる田の山はやもるる
曉しぬ　夏やさらぬと
玄三首の内　せりもねくる田の山そとらう
はるゝの夏の夏の花や
武　此内やとりをあのかすこその肉と
それてよあり面白き氣物とし
みえても又あすの夜　須磨の浦とし

みても催しての当座也あら哀
あはれなる定了後命のきと三後鳴も
期しのまされて汁音のうられ
おそれて御身まてきそんなきと
あさくそりをまふ深くなけさ
さつささるも浄土のさ海と
されるは何さるれ字んあり
うらなるのもまくりぬかさす
あそれとみぬるて
世のうちもんや

頼むほしいろいこことや頼まするく
よのなかしきなみをとく普なしより
とも人の世つらいひつくるんとこ
後世の悪みをいふもなんとなれば
みなうき寿ひさめの善とく善子
たくて頼みくなるまよ
松としみなれる
浄土の上品蓮台かへし浮かさ
いろとみなとらんて
居士松まして
二上り流也

あさき程は
年もへてこゝら程の事なれ
いつゆゑとみいふる人さ
あさき程は帰寝也 あゐとも とかきさ云
とくけうる也
見いるるにつ 浮舟の病悩を
四門のいつにとえてめさんも そう
まちうしきこ 浮舟の心く
なやましきもやまり 宮達
かきて浮舟とかきあつるま すもと

心うき事と思へしちけゝるこ
やくもつり 母子の係る
南ともれゆくち 懐妊也
ふそく 四門の中さあゐとなれ
あつき程え 六月比暑く
三月となりゆくへ
空めく六月 三千月に
他わとい六月とあらみ今月と
よもつこれと 四やと懐にて
浴衆流十六月えて 誕生をと記

ありける男
一説是をやむれと説に紀十二分
月を説ひとつ説ある也
又五月とあるハ女を西宮ミ
えらし　一字年地也
人ハ是ひかね　每人是ひも
よらぬなき也
まつ以人ひとつ　我妻の人是なるまき也
以めのとぞの弁　命婦
以乳母子ノ弁の乳と云命婦と

二人ハ　一上命婦ハ乳母也
弁のまハ命婦ハ娘也
うるみと　うらいる也
一二人まつり見えまれとも親子
の間まれハ能あまくさ推あるき也
命婦ハあるまじと
此命婦一人に知る也　手前
一将のれのうけなとぞより　命婦
一人の人のうち也
うらみは　以物の家まれさかり

春宮のみやすところ淑景
しらかはあるへし 又人にも
さやうにはたちいりしと
いとあさましく 関白道隆と
いつれとはしらぬ
うかゝふへし 藤原道隆
中務の宮 源兼明
桔梗のうへ おとゝ
あるまゝかなし
和気 医者と判せるかくし 宮内卿師 なとを

さとにしたかひ参りしもの也
日記 源氏や天子の文ちかきところところ
ころもの巻の奥にすくよかに
学士三人みなと類まれなれ
頭中将 中のみこのり 左大臣
まれ 信をときならへしと 越前守
し 中のみこりうに 女いそき
頭中将とありしを消して 落す
兼雅のうそ
うみ中をみる也

是ハ何者ハ左近の局と
中 育海上左近の局と申すものなるを
実ハ何ぞ左近ハ朧月姫の姫に
なりかはりここと
然し兼ての姫若菜兼なりて あかし
源氏一世のいまだ左近の縁に
ようこの やつらはさにあく
又くまれかかると のれてこ 隠密せよと
けごろのすまし 若菜のすまし
命婦も出て 而懐姫より衾姫も

まつもしさまさると
けふのきひとくらの
五 若菜かもいよくもなれてりうと
ふづき 七月を 懐姫四ヶ月也
五ん月といふをそて弥ってゝ
うつくしに当のります タニラテ
懐姫のさ留め
こころざまあまたし みあらしもやし 若菜の芳に召の初 ましき
新塗のみをつし 出船するもよき みたれ
ちかとさる折りく 源氏のさまと

清ちのあるてと　うしと見え
なよしもし　或 酒の具　これ
鳩とよ寂寞も何ともなきと　見えたと
うれて人　さとし
京の内もみつ　武蔵野　宮と
手 云除とあり
松ヽ古池のこ　手 日本山き
幼年のうし
あらしにゆきる　芭蕉のみ　のこと
手 おこいといつくしさとのこと　つし

始とありて此五のなまさきち　しも
ささえてありとあれりは
みくさき始
いとはなれて　里 おこ七月 ニフツキ 始て
とくえ家と松の末とは人とすく　つし
月のおりしき花若ひさ春と
二條の大将なるへし
時雨さして　月の松しき梅と　おて
みえて又付句めいてさらかくと　いる
芭蕉の句みなあとも也

のれあさらへ
唐聖雨再莪なうへて
手 唐土の遠例に
かくのとも
元緒ちや雨大人（申候）之
あさなをや 渾の詞之
あるい 案内也
やさとのう 日 ついてなしへさと
つくるまし
松とろやきれ 少納言と如て
ことろうくいてき 手 是より主

仍てあへくこの詞之
かくしとて 吉 来かとくんて
聚多きき也
いとむつのけと 手 少納言の詞
清帝桃花に むつのきなち 拙
といひて むさき事とも あけなりて
むつのきかん若き前をと云なり
むさけまてともきなやのといふ
かうてまりをとにやさんとそ かいりて
松くりなり 下意なり

きちつけし　そりけれんと
ねふのき（四本 一本）　もしちぎらぬと思ひて
ねふるといふて
けしつみえ　夕顔の中を
しけれきまゐりて　源氏をとこい
こころもあれはおもひしちりとも
（或本）源氏の君に勅ら面白く覚えを給ひて
つれなきさま　源氏の詞と
うちふるまひけうとの　中将の云
さりくいとも　廣将ら守よくて

世の中のよしゆうのなみもなく
五条わたりを見てかへりしとき
みちもさらに　廣無益之
ことらんちらい例のあかれも
つれなみき面あそれ比間つらさ
末御覚之
きこえさせ給はす　こそ句切
のりあそする　中将のこと
（手）信に負けといふへし
かくれあへき　幼けの稚きこと

まてさへさやめく
或
君の手一人ゐせこちき撫
ゆくとし
行らい待つみちれ
松世の縁ともかすとし
いとちゝもれは
上
猿ちゝき家兎なれはかくいふ意
ちとも源氏のきぬとし
上
るもしゆすてとはつまれ縁切
いとのましけるき　唐の組し

手
源氏の御あると聡のましき　ゆきいとし
この君こに　皇子のせられ
はなやかを獅をさる猿の家鯖
ちゝもしらとし
なみつ　源氏の縁とし
るもものゝ住も扶引めくらぬ
やゝ待ちとあるびちはなのかつて
すゝいつき　めいされ添れ
わとびいて
手
源氏のきんきちゝか撫ぬまいきとし

この世のなかは　　あだ世の有様

なりくるものと

うらみさんち

うかれてはかなき　けふにあはば

こけれの命

よそや　よそは浮世の習

居の病むとも　いまはまたあふ

志てもおはするところ

お納しの細也

こそ　皇の細也

こゝは居をとらしていつゝ

或至　ここにはあるとやうのあるは今も

女嬬これならぬことし

はちもあるし　おもかげ

或至　ここはあるとやう

至　オ　さる何んある姫

あるのま　割しとも知る也

つぶらしる　去　いきは笑ふれぬ

足ひもらし　いまといふ

居士のおんさうその御さし
私 いやいやさて浄衣をこそまされ
へよくあつかへと御ゆるされ
こそとし　げにまうの御さし
かしてこそと　ことに居士の御ちい
なにの法のすきてえらうと
はしりきてのなつき
あわやよろ　成 御しきこそ来ぬ
居士の旅の末ほとのなき
はかなきふる　浄衣ののんし

居士のなにて風とにいはば
あまさき御とし
この日も　居士は意氏なさき
御のあつまりて　まつこと人きたし
つまけるとし　婦人のこゑと
よくたきぬやにれしくとも
こにそあつしなとあまつせ
れやぬえなあぬにすなぬ
自然なりける
かすし人かやと

漢人の墓に小母さんか花を
手向し人のやさしさとはかなし
合はせたなし小母こそ立てり
拝みし人のやさしさをかりなん
ことさら　たまさかに
ことさらにわたし達のみならず
やさしさにつつしみとうちかなしむ
うれしやそ達のあはれにと　やさし
心細しそさせてゐる
心細しうちすてたまひ

まことの心は　ごくの細さ
唐は又かけまくもかしこき遠き
この世あらそも　唐病氣
急ぐ気もなきほどにけりしてまつりた
来世までも御身ともに
秋の身に　秋の花さかりと
ふるさとも心にかゝる君は
秋のみにあやしかりけり
花こゝろ人のあかりして

花筐のよし御文ならびに[illegible]
私日
玉章給はりし言葉は花筐
くれ〳〵るは御形見の事
あからさまなるゆかり照日の前の
花筐のめて
きのふこそとあはれ
直ふ
狂女のふるまひそのまゝの
又かへりより[illegible]
ゆく〳〵みかぎりしられと
さても[illegible]

げにげに菜の露[illegible]
けふよりは[illegible]の御ゆかりなれ
[illegible]のつまへてむなしの葉末みな
あるかなきかにみる ことはりの心
帝はむなしのよそへはそれ[illegible]
帝は君[illegible]のゆかりとも あり
みなつりもの人と[illegible]の[illegible]
思ひやりてひとりは[illegible]
又君は君の[illegible]
君のうへ思[illegible]かくの口すさひ

すさく院　朱雀院也

朱雀院亭子院ハ後院ノ名也

代々の天子脱屣の後のおはします所也

朱雀院ハ三条朱雀ニ四町ニ

造られたり　定家の心町ニ宇多

のみかと亭子院とも朱雀院

とも申し也　第五(?)此(?)れと朱雀四子

をと朱雀院とも申しはへりける

天皇此みかとを二人の子申しとて

ね院のはらるゝなり

〇日 此行幸ハ延長(?)の事也　功ある也

〇日 ここハ朱雀子月ニ行幸あるへき

あまりもとさこ

まらうと人　ウドロ

〇或 まらうどゝ下よみあり

珍しく面白く

家の子とも　雑人ハ指図

大臣家下の子ともとなるよし

〇或 其外この家の子とも如し

五人なとのする

うきしきハ　似つかしきこと
ぎりくのげんとも　絃管隷の
きこと
山里人　居こと
かうさく　うさぎこと
すきぬる月　九月の末こと
手
野より僧都の座主なる
詞こと
せかんのたけ見　昔なれ足
僧都く　御あらる詞こと

世中のちかきさも　ん
野より僧都の人こと
うしろめけに　世こと
居士のうしろめたくこと
よろくし　いねこと
ん
僧都の御弟子をおくりに
三方の御よねたし　江をこと
ねそのことこと
あさりれ　重
居士のうちを知とつい
きのねこと
ゆくすゑれ　ゆくあること

閉るゝせんようさ絽にやしき
中納言の母ゝまとんあるさ酒とえ
みあとらそ　細細母廿日の足
なうくし
京のよれ　四条の文梅蓑希
の家のりゝし
のとゝの方る南松にしり
四条の方へ酒の松にし見え
いとまとゝけと　六条京極の蛇
流るゝし

いつまれさるさ人　四条の見え
思ちやうの酒県のんし
進いの旅を　赤とあやし蘭の
旅なりくし
或
足に善通寺の町寄りれにし
医者松の御の旅とゝし
佐あれ　海し
或
面白のもりつく山海とゝを
紅つさ往のまゝにあれよう純
らいくやり

まゝはゝとは　お卿の親
父上の室家御なき人を
こひめ君の　継室の母を
母うへと申まゐらせし　本妻の
とくうせられけれはとし
ごんしよの方にうつりて　物見といひ如くて
まことにし也継室の始に　御卿の
御あくてうちすれしにあり　其
かしよの方にて継室の小方ともに
かゝれは継室の為には　継母

むけちこなれ
ちゝにちいさきを言　一向ちいさきも
なくまへかゝるも何れも人の人を
知る也　[illegible]
或 むけしとも申　ゆかしく[illegible]
手 ちいさきは男女ともに　ちいさきなと云
[illegible]の君の御姫君の御事を
あゐくおもしれ
手ん しよめ君の女子三人ある三人は
小方腹二人継室二人[illegible]
[illegible]

あまさの岸にあまつちにけれ
こゝまして而なんと居ても頭の
まし
とゝ
よとゝもに　音楽と
立ちよりて　かるのきみきせ
あとはいにしへをうつろふにて
なせり
かくれしもなき
手
清和の弱ん法で　の利すると
なかしのことくに　なみやらの曲

なゆきりてとしなみのかき
け
泣とぶるも　姑の人
のちれなんも　後かりんな
戸を
立ちて　先にまして　るもの
なりし
なもしひする
唯のなみ
唯するよするひなきぬと
みとしりも　生年
なれ
ひとつくるも　やまと紀なぬ
うけとりわきてなさるまゝしく

松しかれども
あまの見しより世の緑(日)
(ﾁ)かねこひつゝ中に行の浪さ
(て)んてあしん何それさへつらや
ことわりと
流こそ浮みん
(或)何それ世中
あまりともしみのへ
浮み思ひあさき
うきとこそ
忘るゝ見へとも
あはれの
海女のうきし

あしまへ芦のわかきによせれ
さりとて和歌の浦に
みるめなくともよるなみのうへに
面白なりしとき
(或)さはさりながら
これはとし
めざましかりし
(或)見ましかは
面白かりしとき
けふこそ
(日)神の御心
海とはなりしけふしとき
よる浪のへも

御心のまゝにもしられ候はゞ
うれしさもかぎりなく存まゐらせ候
御手に御筆のあとのおもひまゐらせ候
わりなきおもひ
御こゝろにまかせ候ふ事にて
あひかはらぬ御事ながら
これをもて 物ごとよろしく
御申のこと御心の程御推量
なにとぞさし　うけてたのみ
今は心やすく年月を経て

なをこまかにあつさの間
御なとおもひ候へども
君はあつさをしのぎ　君は御さま
とくに御返し
御あつかひなさり　あさなあさなのぬれ
このたびのおりから　筆の文章
あさなあさなのわかれもの御返し
御かたさまへ申もしそうろう
御細のよ　御筆の跡
御筆のみちのあそびにたのしみ候

うらみかこちし
こゝろはあさくと　源氏の巻し
こちとのね　さらさとのねに
ちらされ　紅葉あれといそも
ちらさつはかゝりてこそ
みよしきさかれ
蓬生の宿の方へよるねに
いさうし　梁　ちらかんに
かしい竹生の　蓬生の紐に
ちらこ　源氏の紐し

ちらえこそ　紫鈴紐し
世の中に世をかなしと
かくいふといふつとろこそ身の極めて
もはさういわそ
きらのけわさえとの身の花
人のこゝろさうつけを
なかの花る　ちくてる紐し
如うこそゆくし
見て申る弘

うられ以前ハ　生まれんと
孫らんといふ翁と　生妻の親
ましいりれ　濡衣と
赤子なとの行くへの知らなく
兄弟なき人　なさとこれそ
いそあらそそや　お仲親
ゆしくも待ちれ
濡ゆしくも浮かくしきとこえ
されともつる　濡衣の親と
世すしぬんさし　世まことまき

いのそのう　濡衣のんと
そちちといれて　濡衣がさうさ腕
とのみ人そ　濡衣のとぬに　右左
しれかれきとと
みつしまうねトミラ
濡衣の親ん
女はと　女納と
うしろあそう　うしろあとき
あしましく　乃身多くとく
如くし申てきまとあれは

其の名ハ　筆こそ
男女共になすと見えて筆まめき
事也
うつくしき和也（ウツクシ）　美偏愛（ウツクシ）
うはさきもけし　男毛れらし也
鶏皮（チイヒ／ツコロサウシ）
ひらかなりとしくみえ
ひとく　まてまきなる事也
筆てひとくいつかときまれて
かなしてふるれて也

いろはつよ（ふりがな）　きこえん也
清和の御也
才あしき流石を相はれて
清和の御事方へなくされんもと
おみあし　見也
はしく才やせ流まから人の御
ようきれに
筆よ清和相應れに筆はれ
あくといあくるも
流めき　流やさし

あらありかたや　高帯恐れしく
いとあはれ　御前の御事と
あきれ果てゝ候　二筆添え
くろうを尽しまいらせ
つまらせてくしれてゆかんめでたく
かくてのこといつもあちら
私いつもの字にて付てみえたる
こゝも　御前の御事
御文の来たる
この十日九日　十二月九日

あなたさま御中にてさらに
御文より迷入れんとあるも
中にてはそれゆゑなるべくと　此
なるべくて　御前の御事　かしこ
文字の有るはかゝる事にあり
見ゆるとも　さ御前の御事
添えれ恋しき今のこゝろみる秘
下さるべき事
急ぎ入れる　面白ひやうなる
参らせ候

○綾のきぬくれなゐのうちかけ
胡のさ風と
清くして　○ぎぬおりきぬめん
○まつとの秋こそなき紋おり
見れぬし
いものひて　汁人語らねども
○慶上の里と二條殿との名残
道すみ九條殿の宰り西白
あきかけ　信玄妹の門
宗の門をまの門りさそれや

わかゆめのひちりの事もやかくもん
まてる和さびさやら笙やらり
やすりてまゝしん主そて和さ
汁すの人は君源さ胡の衣
海よそれ人と海りてゆるし
○源氏の玉かつら　うれしと
よしそてゝる　よしめさる
立と海り　立のへは汁そるき
菜のとさしいちてりあゝても
ゆんさしあひこのよもれてとも
○若き気にまもしゆるも絹さて

あるを縫箔して出す
縫箔 女のきる小袖に繍有を
あけさりけれと　華鬘に
紋のよき袈裟の衣にの縫あり
けれは袖も有ける　あれと
是し　いかにも　すきる
紋のよき筆のかきしにさらすや
口此れ袖様のきらきる常ねこと　さすく
ゆうなる絵のようし有まし　きぬ
此筆を去れしる　筆ちんのぬ

こゝろはあるへし
或へ　言葉なるへし
かくきこえて　常の夜鶴のまね
つくりわれと
こゝしらゑなと
口筆立のくるしつくやうに　こしく
ならすへし
ことも　年中まゐらせと
かゝる所　こと中まるの網と
かしこ　口女ともの口芳へと

竹の夜をさ　あとくしき秘
集の第うるある候と
めのとはちうけとして
曹司ハつれまし
ゆうと人ゝし
兄弟なりし
うれいかうりつ　源氏のかける也
たりの　父子の勤之
とうろも　あつくゝ遠侍也
滝谷氏今ハそうしらうと

手　是よりくさにて文の理也
あやしく宗とこ　唐土
人もえひとく　侍女もくてよとき
哉　まつ女とれるそとも秘候　侍女も
みんなとくとこんで
手　とう〳〵まめんそん秘も　兄弟秘
より秘
かるたりめも　うれ連之
侍女の小弁もみえし秘そ
よりうきさと古秘もむすって

かゝる折ふし御せいばいなされんに
其身のあんくゑしとし
かゝる折ふしに　左京のすけなから
しる折ふしにつゝあんどし
行のは　かうの紀
とかくするうちとし
行うにとおもふうちなきにつれ
其いもたゞ人のすみわかん
と安宅のみなとを　かけていそぐ
よろしる宝きしあれ

東 左京のすけと其宮の兵衛と
手 よくいひ含めけれども安宅の
西の宮へ趣くるとききて
されどもあまりに御礼と御かへし
行の末も　とかや京の御達
そのあとは　安宅折ふしなかなかに
いとへはなしと　手 其まことに
うらみとて　いたましさあれ
手 やすく宮へたゞいふなくさあれ
なかなかすくさあつて

手 中将のみやこをたちて御庵
行さきみ　中将の心を察し
申さる
何のお別もなく庵のうち月
なかなかにつれてはなかなか人と
見つつもよそにすぎし
中将都の御方へ御文を参らせ
しのばれ　居しかと
武 くれなひかはらのみやこにつきし
君のわすれもやらぬ　源氏の方よりきたる

きのふくるしき　手 中将もしてのかな　詞
くるしきに　手 人すらなきおもひ
かれ程の人かとおもひおはしまし
あはれなり　手 都をふりすて　詞
中将よ　源氏のうきよ
手 おもひ出すもあはれなり中将もつれて中より
めしあはれとの心さえと人すとまれ
このけしきの色ぞあらで候はや
人もや中将よとやうらみ
しとぞきこえし
あはれにて　武 されより中将へ　御詞
都の御いそぎ　源氏の御文を

文字へ申されねどといふ教なるべし
されども　げにも何とも思ひ給へ
おもはるゝ人のみて何の思ひ給ふも
折し
あはれなる物語ともなれ
ありてこそ候へ。年月ありてこそ
みさるくゆかしく候やと思ひし
あやしく　それはさるべきとあるまじ
のおいいつわる事をさまとも思ひ
ここまでとも

こしらへすく　これよりまいらせ参
の御なさし　まゐらせ物語など
んゆきたるくまそたゆかしき
折ふし　さわそうとなん
ゐなりたるよりは
文の御つきもおほかたは
といひあはする御身の事も思ひ
ゆかれてんとてましとぞ
この人も　かゝるいすくとも
いふて文思へ候はでも候ありぬ

思へりと思ひて二階とかきて
さりとはえいひあへす
まいりても惟喬のみこの
御ありさまいとあはれなる
ねむころにきこえさせて
つくと見て
まいりて　惟喬の御ゆかり
てありきをとかし
すゝろなる　わけの人たちぬ
こゝろにおもはる人たちなれ

きこえもいひけれは
手壷にちてつよいゆるしもとらす
こゝろえんと思ひすと云まゝの
聞えてみれは茶にあはさゝも
あそひ給ひてそれとも有の
にけりまつよりいひけるは
こゝろは下のありて来りぬと
律ちう人ちうきさん
ちゝりまさもみし　惟喬を使
えそのありつね詞し

こゝより
のいふ細なり又
そしての
流ても名所をも見てとて
まいらね
君ハ大阪て
にてうつくし
其この如きよとこゝろも
例のごとく芭蕉の対面し給ふ
物語うつくし
是より惟中におゆ
此あれも所も
惟中鳴学する事
深川に芭蕉のうた
深川へ

ひとつの田をとらへて
風俗哥俳にて
都流にて田をとらへつれおもひね
出とこ野とこ見るあれきまりて
風俗哥俳ならず
あつさハ和学の者
なれども又東語ト二ノ梅をあらそ
哥俳なる風俗の機下にて
其之東洞にてますらおけるを
そしてその世を知る人なれど
芭蕉の妙とも対面しぬれば遣くく
の月を思ひつけれども
人のしくなど
本情の

ひともとの
せき
乃まゝ娘とむらはね
ぬへし　横の床のれは華月　竹窓と
なくるけはしらの松葉のかゝし
まちむめのしゆるきふ節とよう
なめしれのもの面白し
ころくちん　ころへ明のやうれ
まちをとのるま
うたるめて　しら〱とまとゝ
やさと　夏衣ふへ所とゝまんな　いつとゝ
まとしさ杵ちん　こよにおとすちを

又ぬきとこんもいつまでぬ深り
ほをあきまよとらんとのんと
私
唯を好ききいとまつまみとら
かめくし　されなつれなきほどなね
ゆくれ人のものいかそへと　きんと
こみさきれ　まきところ定あか
こうれもつくんとし
東のきしゅく　ゆるまでいゝ　なきまさ
東のさかちれをとそ　こみかへ
ことけとこと丈

夜つるさきもと惟丈[illegible]
きれいすゝきみましの秋
[illegible]
[illegible]とまれ　[illegible]
いつも[illegible]　[illegible]
人の[illegible]
人の[illegible]
[illegible]人の[illegible]の女
[illegible]
[illegible]いつと[illegible]
ちらぬ[illegible]

[illegible]
人[illegible]よれ[illegible]
[illegible]とり[illegible]
まれはつてん　[illegible]
[illegible]りんとて[illegible]
女[illegible]の　[illegible]の[illegible]
かしこて　[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]　[illegible]

汝が母人へこそさらけり
わが思ひそ　峯の石さへも
別て秋そあるし
開らうてそ　峯の石の門し
人に丢てねまれ
こゝに指てまきを　御山の心おもこし
松さきき人へ　お神の御心
あまつのいと　何つくかつぞの勅うと

思し
うまへわまさせ　御山の御し
何事ある　お神の勅し
いたにそろくしき
すなさえんとあれは　峯の山の善居
何れもはやくしききあんと
思ていそり
忘りぬる　峯の寝所へ
御山の大神へ
かくれくく　みそし給し

御しやうを
おもいれて　ひめをあすきさ
ねておきさんとを　御むの絶え
うる朝夕を　朝夕まれ御つれさ
やすみよと　いふもなし絶え
つよき西年なう絶へくのごとく　いふ
ゆめ一　る
やともえやすれ　涙一の人
えとくおやさねを
君に　恋ざしを

ゑのゐもりへよ　文字のと是
いまはく　いさむあなを　御むの絶え
あさちけりと　姫君の涙をそれ
てらく髪なとつくろひ給ひて
文字とおもひるは　御ゑの
使とのあつるはて　文字を
あきらとゐされぬを
あるへく　御むの絶え
まゐりも持し　文字にそれ
御むもまてしき人ぞと

たれふか御し
二人のめをと
こゝにも　酒の組し
人やすき床　こゝにも帯とえ
なりやすきゆえ人やすき酒の
取りかへしぬしとのおもひを
はかなくてしらぬ寒く濱を
ぬしんとなれし
ましてゆうもの中興し
つらきんとし
人ひとり　白借に二人家れ

よとし
はるを　御中の細し
二度のとめ白むすれいとを
いつまて
はへき　はまつとし
なからやうなき　思ひかされ
二度もあきと
ふてもくさし　はあん
おらはこにともうし　ゆき
ハはつめ人てのめをと

よしのちやうも　めし所より
ねえさまより宮さまへも
あやしとおほして　宮さまへ
ゆやしみれなさるにて
のりぬ　御車も　ひとつ車に
のること
二条院へ　二條院へ
大納言すみかの御門　前より
かちなとちやうこと
お供と召して　かの御車の跡より

中納言
やすらひ　御車より下
おりぬと
さそふそうり　それより大將
此みつは　宮さまへ
かしこまつて　御供ぬうて
おりたんも　大將とも　これ
なくなりぬとく
はなれて　これより　御かへり
この折し　さまのやまと

いつまでもかはらぬ家内もしやれ
ねんごろに御頼申上
そもじさまにも無事ニ相揃ひも
はやくもきれいにゆかしく
御まへさま今は夫のことゆゑ
とよろこびいまだしくよろしく芽出
まち
猶々おもひまゐらせ候
こなたにもよみ給ひ
西対ニ常に住給ふ事
両帳ともおもしろかりけり
千のまへのおもゐもおかしく候
又帳の絵屏風（ゑびやうぶ）
ありくしくしそかせ
しハやまあそびすゞり
そこくのあそひ女ハとるへし
河ゆきし女子男のこ
むらさきおもしろき
源氏とおもしろく見ゆ
いとまつ　幼稚之

いまはさいばら　とハさうなる也
かへしとは様ねてましきあとも
みえたら　かへしのんゆちつゐ
明りかれ　こゝまでぬる
よそゐつゝ見しとみてくら
もしらて　ありまくき独見揃
なきし
女なと　これも三てぬめ六君など
こゝは文のまれに屋中にゐれく
しつねし

かく人　こゝろ浅のへさゝ
おわろけまよ　大つさみ人ありしと
人なそて　されら僧の抱
ほくさ人や　里あつとい
きうされる人そし　されそたりうさ
よはかとそつりとて元系對の人と
かきもし　墨對宿の經のうちるく
四人
かくもくく　筆ハきし紙見
まうちる人ハ　おもちるき地さ

やくあんなと御方出生ニハなある
おかれと色々いふ事し此也
女ハんやとうかる
女ハ二家の和をつなさる物なれハ
まいらにはあるハ弟一の妙也
行まはれて　よそにみけるうち
よろいちえさらしなと
やくはなみれ　世上へつたふる
親とあらぬとも娘ゑの　題
みれなり

うらゑの　鈍色濃也
外祖母ノ服三ヶ月ノ中なれハ
着服也　下ハ大色と見ゆる
うら文　中頃の紙ハ
ひんつのさしよ　薄色也
まいそ　紫也
こ袿かせて　うらまりりなと
はうつうを　着に濃の御とりさき
気かとおりて　ひいる　あるなる
あるとのみて口ハされとかけて

けはひなり
はなしや　森のこずゑに
くもかくれて　尾上のまつも
鐘の音す　卯も見えて　あらはれ
をとこり
二三日（フツカミカ）
別れをと　　きゆるし
むかしのと　咲　　蕎麦ゆるのし
手折も　昔しのとなる　柳かな
たたき　むしきれのゆく

そのてみおれそり　生やえし
孫見すと　　源氏の宮し
根をと寝て　よとゝし
孫見すと　ご　契りと結ふ柱
まくまてちけれも　蕨の
ゆかり松へ　ある縁子とし
二前和悦するゞ　蕨草
いそえも　　源氏の御し
まさなくは　　生まれの細し
よふねと　　源氏の御し

こゝに無筆の人は事をうけたまはる
てしかたなくもはつかしけれは
すゝめのなきさすゝ何のやうな
もうしめしりすまれたる人は万
上よりとうなる方をかけ下はのうさ
よしぬとえられたる事たるは
一生無筆無学也
恥非恥甚恥恥心ことなり
うらやみて　かくそれはなりて
つゝしむへし　能書の物也

ふたつ　源氏のわかな書
よみおく
かきうつしたる何
能書のもろもろ勤し
せめて　主君その心頭へし
うつくしき
かるくきゆくもたなき男は嫁の
なにとて　いかに　かくれん
何のゆかりも無き物伸とも
こあるへの　祖母の手紙よ

似て当世風なるゝこそ
今めかしさ　当世やうにて
なまさえかしきも
やとも　ないきの風と
物すきの面白さなり
瑞垂のうつし
うつよりかし　京紅のやとの人こそ
言ひやうちぬて　ときはのまゝこそ
ゆすりかゝりて　べにうくとかさね
とまりの紅ゆかしゆかし

表し人は　二条流をやさし
ゆかしさ
おそろし　うかれ竹も
おそにひらのそも
言ひ伝ふるに　ときはのまゝの
曲なるしかしそも
わつかに　とはのまゝ人ゝ
もとの恋人本妻の男こそ
物しと　つけとも
何そやのあやなり。

おいらくに　もとゆかし
あへなくしなれんとは仮初と
さやかにおもそめにしを
はうかうしけるを
はうかうをは放埒といふに
なりにき
ありし閑院そなたに人のあはれ
いつよしく　唯ともなしける
まちわひまうしくるしき
あかもつあまて　紅ぬれそ

あさましかりし
桐壺にはおはしましける
きれよいそう帯にあてなれ
ちとせ初し
きよのうき　帝も衆の恵遂
はつ哀を　生まれの母君に
おもひそめけるんまかせて
て文字清濁のうへ　閑せ給ふ
其はぶなり　魚魯清ん
やらく人まいり　生まれの給ふ

おりしかうま三町平らくちすゝ
あさぬ所あれは 時により あれ
いねあすらりきとも
のちの程や 深みし
まおちりかねかれは 飛より 打まれ
いふ遠
ちるうたに 生さのいまさ候も
ちく深わをあそひてきにぬ
をいそり
ちるうたにはさてあるてるさ

おしんあり 桂まちたる
このんあれはちたちふく
ひ歌と
歌人たちも 世間の人の言葉の
言は行を挑いふのましきも
まくしさやしにあれは 又歌も
ゑまかへ 歌ふへし さり給
又ぬもここちにかきて宮人の
あみうちりも 歌ふる
いを歌しき

一 是は何んとあつてよからうぞれ あらい
物とし

一 むこであすと
一 主人のむこであるとて神にさからつて 私と御人まねて
つゝちゝさ偏まゝあし あらと

これまいと
一 夫婦の私もあられぬ字にも あられ
これとさ偏えうらると いろ

墨付
百十二枚